

漢詩に於ける杏花のイメージの變遷

矢嶋美都子

一 はじめに

中國の詩に描かれた植物は、單に季節や實景を示すだけの場合もあるが、多くは各々の植物に附加されているイメージを意識して詩の世界を豊にしようと配したものである。だから、ある詩の詩意及び詩人の意圖をより深く知るためには、その詩に描かれている植物のイメージを理解しておく必要がある。

本稿では、晩唐・杜牧の作とされる「清明」詩に、或は中唐・張籍の「哀孟寂」詩等に杏花が詠われることに着目し、そのイメージを追求めてみようと思う。二首の杏花の句を掲げておく。

牧童遙指杏花村、牧童遙かに指さす杏花村（「清明」詩）

杏花零落寺門前、杏花零落す寺門の前（「哀孟寂」詩）

ここに詠われる杏花であるが、杏花は花自体ごく普通の花であるのにそのイメージは、他のバラ科の梅や桃、海棠等が固有のイメージを負っているのに對して、はつきりしないところがある。

そもそも植物のイメージは、時代の變遷につれて少しずつ變化或は新しいイメージが附加されて來て、唐詩には大體それらが出盡し、固定する傾向がある。

杏花のイメージも基本的には同様の傾向をたどるが、新しいイメージの出現、附加に際して興味深い特徴が見られる。これは杏花のイメージの特異性といえるものと思われる。

そこで、本論では、古代から唐代まで時代の流れに従って整理検討することにする。これは詩の發展の跡を明らかにすることに資する意義もあると思われる。

二 漢代以前の杏花のイメージ

杏花のイメージを考察するのに、先ず漢代以前を見る。「詩經」及び、『楚辭』には、杏花は出現しない。しかしこれは古代中國に杏が存在しなかつたという事ではなく他の文獻を調べると、例えば『太平御覽』卷九六八果部五杏の項に

師曠占曰杏多實、不虫者、來年秋善（師曠占に曰く、杏多く實り虫くわざれば、來年の秋、善し）

とある。又、『藝文類聚』卷八十七菓部下杏の項にも

師曠占曰梅桃杏實多者、來年謂之穰（師曠占に曰く、梅桃杏の實多ければ、來年は之を穰と謂う）

とある。これらはいずれも杏がよく實るか否かは稻の豊作に關係があ

る、というもので、杏が、農耕社会の人々の生活と密着した植物であった事を示している。

つまり漢代以前は、花よりも、食用にもなったであろう杏の實に、
稻が豊作か否かを占い見る意味を含めて大きな關心が注がれていた、
と思われる。

なお、これらは「杏實禾善」(杏實れば禾善し)、或は、「杏實主穰」
(杏實は穰を主とする)という農諺となつて今日に傳つている。

三 漢代の杏花のイメージ

(一) 農耕のシグナル

漢代に入ると、杏(花)のイメージが(一)農耕のシグナル、(二)建築用材、の二方向になる。

先ず(一)農耕のシグナルから検討する。これは二で見た農耕にまつわる植物のイメージがより具體的になつたもので、漢代の農事家の氾勝之書に

杏始華榮、輒耕輕土弱土、望杏花落、復耕之、輒闢之(杏始めて華榮きて、輒ち輕土弱土を耕す、杏花の落つるを望み、復た之を耕し、輒ち之を闢す)

とある。杏花が農耕の時期を知らせる重要なシグナルであつた事が分る。

この杏花の農耕のシグナルのイメージが文學作品に反映するのは六朝になつてからで、次の例の如く、六朝を経て隋のころまで傳わつてゆく。

◎齊・王融の「永明九年策秀才文」其二に

將使杏花萑葉、耕種不愆(將に杏花萑葉をして耕種愆たざらしむ)

漢詩に於ける杏花のイメージの變遷

とある。萑蒲の葉も農耕のシグナルであつた。

◎梁(北周)・庾信の「奉和永豐殿下」其六に

興雲榆莢晚 興雲榆莢の晩れ

燒薶杏花始 燒薶は杏花の始め

とある。燒薶は春の耕作の前に草を薶り、燒き拂うこと。

◎梁(陳)・徐陵の「司空徐州刺史侯安都德政碑」に

望杏教耕、瞻蒲勸穡(杏(花)を望み耕を教し、(萑)蒲を瞻て穡を勸む)

とある。穡は農事。

◎隋・郊廟歌辭「春祈稷諫夏」に

瞻榆束耒、望杏開田(榆を瞻て耒を束ね、杏を望み田を開く)とある。

杏花の農耕のシグナルのイメージは後に、「杏花生種百穀」(杏花生ずれば百穀種う)の農諺になつた。

(二) 建築用材としての杏(杏梁)

文學作品に初めて杏(杏梁)が登場するのは漢代になつてからで、司馬相如の「長門賦」に次のようにある。

刻木蘭以爲榱兮 木蘭を刻し以て榱となし

飾文杏以爲梁 文杏を飾り以て梁となす

文杏は榱目の正しい杏の木。美しい宮女や皇后がいる宮殿の梁に使用された。これは建築用材(高級な)としての杏であるが、以後、「杏梁」の語で特に六朝時代、主に女性の部屋象徴として盛んに使われ、唐代まで繼承されてゆく。

例えば、齊・謝朓の「詠燭」詩に

杏梁賓未散

杏梁の賓未だ散ぜず

桂宮明欲沈

桂宮の明沈まんと欲す

とあり、梁・簡文帝の「擬落日中座」詩に

杏梁斜日照

杏梁に斜日照り

余暉映美人

余暉美人に映す

とあり、更に唐代になっても、例えば王維の「輞川集」文杏館に

文杏裁爲梁

文杏を裁ちて梁となし

香茅結爲宇

香茅を結びて宇となす

と使われている。

他に洛陽の宮殿の一つに「杏間堂皇」があった(『太平御覽』卷一七六居處部堂皇に引く『洛陽記』)ので、「杏間堂」「杏堂」の用例も六朝時代の詩に見られる。いずれにしても建築用材としての杏である。

以上、杏・杏花のイメージは、先ず農耕にまつわる植物(食用も含む)として表われ、漢代に入つて、農耕のシグナル、建築用材の二方向に發展した。つまり六朝以前の杏・杏花は實用の植物と認識されていた、といえよう。
次に六朝時代の杏花のイメージを見る。

四 六朝時代の杏花のイメージ

(一) 杏花の美しさを詠じるもの

六朝時代の杏花のイメージは、基本的には三で見たと如く、漢代までのイメージを強く繼承している。ただ、そういった中にも注目すべき二つの新しいイメージの發生が看取される。

(一) 詩の素材として杏花の美しさに氣つきそれを詠じようとするもの。

(二) 仙味を帯びた植物というイメージの出現、である。

先ず、(一)杏花の美しさを詠じようとするものから見てゆくと、例えば梁(北周)庾信の「杏花詩」がある。

春色方盈野

春色方に野に盈ち

枝枝綻翠英

枝枝翠英を綻ばす

依稀映村塢

依稀として村塢に映じ

爛熳開山城

爛熳として山城に開く

好折待賓客

好し折りて賓客を待たん

金盤襯紅瓊

金盤紅瓊に襯たり

これは當時流行した詠物詩の一つだが、純粹に杏花そのものを詠じている。又、同時期の王褒は春景色の點景として「燕歌行」で、

桃花落地杏花舒

桃花地に落ち杏花舒び

桐生井底寒葉疎

桐は井底に生じて寒葉疎なり

と詠じている。桃と杏の組み合わせは、先行例に宋・臨川王義慶の「遊龍湖」詩の

梅花覆樹白梅花

梅花樹を覆って白く

桃杏發榮光桃杏

桃杏榮を發いて光る

がある。やはり春景色を詠じたもの。これは唐代まで繼承されるがこの時期、桃と杏の組み合わせで興味深い例が一つある。梁・武帝(一本に王金珠の作)の「上聲歌」の

花色過桃杏

花色は桃杏に過ぎ

名稱重金瓊

名稱は金瓊より重ぜられる

これは美人の顔を桃や杏(の花)より美しいというもの。美人を花に喩えたり、花と比べたりするのは一種の常套的修辭だが、不思議なこと、杏(花)は單獨ではもちろん、桃との組み合わせでもこの方向

には殆ど發展しなかつた。後世の小説や戯曲に「杏臉桃腮」・「杏眼桃腮」(所謂アーモンドアイ)の熟語が見られる程度である。

一方、桃花は美人のイメージで、唐代はもちろんほぼ同時期の詩人にも詠じられている。例えば梁(陳)・周弘正の「看新娘」詩に

婦色勝桃花 婦色は桃花に勝り

とあり、陳・後主の「紫驪馬」に

紅臉桃花色 紅臉は桃花の色

とある。

杏花が美人のイメージで發展しなかつたのは杏花の色が一因していると思われ。

『本草』杏の注には

杏葉皆圓而尖、二月紅花開(杏葉は皆圓にして尖、二月紅花開

く)

とあり、紅い花というのだが、詩人によって異なる。例えば、先に見た庾信の「杏花」詩では、

枝枝綻翠英 枝枝翠英を綻ぼす

とあり、翠英(みどりのはなぶさ)という。これはつばみとも考えられるが、晚唐・項斯の「夢仙」詩には、

紅樓近月宜寒水 紅樓月に近く寒水に宜しく

綠杏搖風占古春 綠杏風に搖ぎ古春を占む

と、綠杏とある。唐・王維の「春中田園作」詩には

村邊杏花白 村邊の杏花白し

と、白いといい、唐・韓愈は「杏花」詩で、

杏花兩株能白紅 杏花兩株能た白紅

と、白と紅の二本をいう。又・唐・鄭谷は「杏花」詩で

漢詩に於ける杏花のイメージの變遷

不學梅欺雪 梅の雪を欺くを學ず
輕紅照碧池 輕紅碧池を照らす

という。輕紅は淡いピンク。又、唐・孫何の「詠杏花」詩には

殷紅鄙桃艷 殷紅は桃艷を鄙とし

淡白笑梨花 淡白は梨花を笑う

とあり、紅は紅でも桃のような下品な紅ではないし、白は白でも梨のようなそっけない白ではない、という。つまり、詩人に認識されている杏花の色は翠英(つばみ)、綠杏(花後の杏)を含めると、綠、

白、紅、ピンクと四種類もあった。更に『埤雅』に

梅至北方多變而成杏、故人有不識梅者、地氣使然也(梅北方に至れば多く變じて杏となる、故に人の梅を識らざる者有り、地氣の然らしむなり)

とあり、梅と杏が混同されていたことも窺える。

この様に多様に各人の杏(花)に對する美意識がズレていると共通のイメージになりにくいと思われる。又、漢代からの「杏梁」の語が美人の部屋の特徴として定着したことも、更には、次に検討を加える

が、このころ杏(花)に仙郷にふさわしい植物、といったイメージが出現したことも、杏(花)が美人のイメージの方向へ發度しなかつた原因と推察される。

そこで次に(一)仙味を帯びた杏のイメージを見る。

(二) 仙味を帯びた植物

六朝時代になって、杏(花)に仙味を帯びた植物のイメージが出現した。この背景には、當時流行していた「志怪小説」の影響があると

思われる。そこで先ず「志怪」の中で、杏はどのような植物として描

かれていますか見ておくことにする。『太平御覽』卷九六八果部及び『藝文類聚』卷八七菓部下の引く『山海經』には、

靈山之下、其木多杏（靈山の下、其の木に杏多し）

とある。靈山のふもとには杏が多くある、という。又、『西京雜記』には

上林苑有（文杏）蓬萊杏、東海都尉于台、獻杏一株、花雜五色、六出、云是仙人所食者（上林苑に（文杏）蓬萊杏有り、東海都尉の于台、杏一株を獻す、花は五色を雜え六出、云う是れ仙人の食う所の者なり、と）

とある。五色で六瓣の花をつける杏で、仙人の食べるものである。又、『神仙傳』には、董奉（後漢の人と傳えられる仙人）の故事が載っている。

董奉居廬山、不種田、日爲人治病、亦不取錢、重病愈者、使栽杏五株、輕者一株、如此數年、計得十萬餘株、鬱然成林：中略：於林中作一草舍、時人欲買杏者、不須報奉、但將穀一器置倉中、自往取一器杏去、嘗有人置穀來少、而取杏去多者、林中羣虎出吼逐之：中略：奉每年貸杏、得穀以賑救貧乏（董奉廬山に居て、田を種えず、日に人の爲に病を治し、亦た錢を取らず、重病の愈る者に杏五株を栽えしめ、輕者は一株、此の如くして數年、計して十萬餘株を得て、鬱然として林を成す：中略：林中に一草舍を作り、時人の杏を買わんと欲する者は（董）奉に報ずるを須いず、但だ穀（物）一器を倉中に置き、自ら往いて一器の杏を取り去る。嘗て人の穀を置き來ること少なくて杏を取り去ることの多き者有り、林中の群虎出で吼え之を逐う：中略：奉は毎年杏を貸し穀を得て以て貧乏を賑救す）

董奉のこの故事は、杏林の語で後に名醫の代稱ともなったが、虎まで登場して靈妙さを示している。又、『述異記』には

杏園洲在南海中、多杏、海上人云、仙人種杏處、漢時嘗有人舟行遇風、泊此洲、五六日、日食杏故免死（杏園洲は南海の中に在り、杏多し、海上の人云う、仙人杏を種えし處なり、漢時、嘗て人の舟行して風に遇い、此の洲に泊する有り、五六日、日に杏を食い故に死を免れし、と）

とある。仙人が種えた杏即ちこれを食せば餓死をまぬがれるという靈驗を持つ杏である。

これらの例から「志怪」の中で杏（花）は仙味を帯びた植物として認識されていた事が分る。

そこで、杏花のこういったイメージが六朝時代の詩にどのように反映しているか、次に見てみよう。梁（北周）・王褒は「輕舉篇」で

流珠餘舊竈 流珠舊竈に餘り

種杏發新叢 種杏新叢に發く

という。流珠は『神仙傳』卷四劉安に

「一人能煎泥成金、凝鉛爲銀、水鍊八石、飛騰流珠」（一人は能く泥を煎じて金を成し、鉛を凝して銀を爲り、水もて八石を鍊り、流珠を飛騰す）

とある仙樂の一つ。或は水銀の異名。種杏は先に引用した『述異記』の「海上人云仙人種杏處」をふまえて、仙人が種えた杏、の意。二句は仙人世界の描寫になつている。又、庾信は「道士步虛詞」其五で、

移梨付苑吏 移せし梨は苑吏に付し

種杏乞山人 種えし杏は山人に乞う

という。移梨の句は『神仙傳』卷九介象に

「後告言病、帝遣左右姬侍、以美梨一奩、賜象、象食之、須臾便死。帝埋葬之。以日中時死、哺已至建業、所賜梨、付苑吏種之、吏後以表聞、吳王即發棺視之、唯一符耳」(後に病を告げて言う。帝は左右の姫侍を遣り、美梨一奩を以て、象に賜う。象之を食い、須臾にして便ち死す。帝之を埋葬す。日中の時を以て死すに、哺に已に建業に至り、賜わるる所の梨を苑吏に付し之を種えしむ、吏後に以て表聞し、吳王棺を發いて之を視れば、唯だ一符のみあり)

とあるに據る。移梨は仙人の移した梨。種杏は先に引用した『述異記』(仙人の種えた杏)と『神仙傳』董奉に、

「計得十萬餘株、鬱然成林……中略……奉每年貸杏、得穀以賑救貧乏」(計して十萬餘株を得て、鬱然として林を成す……中……略奉は毎年杏を貸し、穀を得て以て貧乏を賑救す)

とあるを併せたもの。二句で道士の世界を仙界にみたてて描いている。又、張正見は「神仙篇」で

尋陽杏花終難朽 尋陽の杏花終に朽ち難く

武陵桃花未曾落 武陵の桃花未だ曾て落ちず

という。尋陽の句は、先に引用した『神仙傳』董奉と、『尋陽記』に

「杏花在北嶺山上數百株、今猶稱董先生杏」(杏花北嶺上に在り數百株、今猶稱す董先生の杏と)

とあるに據り、董奉の杏林の杏花をいう。武陵の句は陶淵明の「桃花源記」(これも「志怪」)の桃花をふまえたもの。二句で神傳世界を描いている。この組み合わせと用法は唐代に繼承されるので記憶しておく必要がある。又、同じ頃、江總の「玄圃石室銘」には

朔去偷桃 朔は去いて桃を偷み

董來貸杏 董は來りて杏を貸す

とある。これは玄圃即ち崑崙山にあるという仙人の居所を描いた部分だが、ここでは董奉の故事と東方朔の桃を配している。

東方朔の桃は「漢武故事」に見える話で、仙女・西王母が武帝の宮殿を訪問した時、侍臣の東方朔を指して、彼はもと仙界の者で、私の國から三千年に一度實る玉桃を盗んで逃げたのです、と言ったという。

これらの詩の中で、杏(花)は仙人世界にまつわる或はふさわしいものとして描かれている。

つまり、これらの詩は、六朝時代、志怪小説の盛行と相俟って、そこで形成された杏の仙味を帯びた植物というイメージが、詩の世界にも反映し、杏が仙郷にふさわしい植物として詠じられるようになった例證ともいえよう。

又、六朝時代、杏は單獨ではないが、隱棲の場所に配されている。晉・潘岳の「閑居賦」に、

爰定我居……梅杏賄棣之屬、繁榮麗藻之飾、華實照爛(爰に我が居を定め……梅杏賄棣の屬、繁榮麗藻を之れ飾る、華實照爛し……)

とあり、又、宋・謝靈運の「山居賦」に、
杏壇、椽園、橘林、栗圃、とある。

これらは食用としての必要性もあって植えられたとも思われ、まだ隱逸世界を象徴する植物といえるほどにはシンボライズされていないが、その萌芽と見ておいてよい、と思われる。

以上、六朝時代の杏・杏花のイメージを見た。杏花の美しさの發見

と仙味を帯びた植物というイメージが唐代でどのように展開するか次に見てみる。

五 唐代の杏花のイメージ

(一) 仙味を帯びたイメージの發展

唐代の杏花のイメージは、これまで見て来たイメージを基底にして
いるが、特筆すべき特徴が二點ある。

(一) 六朝時代に出現した仙味を帯びた植物のイメージが更に發展、定
着する過程で隱逸世界のイメージをも派生した事。

(二) 全く新しい科學合格の吉祥花のイメージが附加された事、であ
る。

先ず(一)から検討してゆく。初唐・張九齡の「出爲予章郡途次廬山東
巖下」詩に

攀崖猶昔境 崖を攀ずれば猶お昔境のごとし

種杏非舊林 杏を種えしは舊林に非ず

とある。種杏の句は四で見た六朝以來の故事用例に倣い廬山の東巖下
を仙境に喩している。これは晚唐まで繼承される基本的用法となるが
盛唐の王維にこの變型が見られるのでこれを次の三類に分類、整理し
て論を進めることにする。

④董奉らの故事をふまえて仙境神仙世界を喩えるもの。張九齡の種
杏の句もこれに類するが、例えば「送友人歸山歌」其一に

神與棗兮如瓜 神は棗を與え瓜の如く

虎賣杏兮收穀 虎は杏を賣り穀を收む

とある。虎が杏を賣るの句は四で見た「神仙傳」にある董奉の故事を

ふまえたもの。

⑤同じく董奉らの故事をふまえるが、陶淵明のイメージと組み合わ
せて隱逸世界を描くもの。例えば「送張舍人佐江州同薛據十韻」に、

董奉杏成林 董奉の杏は林を成し

陶潛菊盈把 陶潛の菊は把に盈つ

とあり、又「送六舅歸陸渾」に

……

條桑臘月下 桑を條る臘月の下

種杏春風前 杏を種うる春風の前

酌醴賦歸去 醴を酌み歸去を賦し

共知陶令賢 共に知る陶令の賢

とある。これに類する作品には、盛唐・皇甫冉の「送鄭二之茅山」詩

があり

犬吠鷄鳴幾處 犬吠え鷄鳴くは幾處ぞ

條桑種杏何人 桑を條し杏を種えるは何人ぞ

という。犬吠の句は陶淵明の「歸園田居」其一をふまえる。又、盛

唐・儲光羲の「田家即事答崖二東臯作」詩には、

元鳥双双飛 元鳥双双と飛び

杏林初發花 杏林初めて花を發く

响諭命僮僕 响諭僮僕に命じ

可以樹桑麻 以て桑麻を樹えるべし

清且理犁鋤 清且犁鋤を理め

日入未還家、日入りて未だ家に還らず

とあり、目につく熟語だけでも、僮僕は陶淵明の「歸去來兮辭」、桑

麻は「歸園田居」其二、理犁鋤は「歸園田居」其三をふまえている。

又、盛唐・劉長卿の「過鄭山人所居」詩には

寂寂孤鶯啼杏園 寂寂たる孤鶯杏園に啼き

寥寥一犬吠桃源、 寥寥たる一犬桃源に吠ゆ

とある。これらの詩は隱棲の場所を超俗の別天地として詠じ、その象徴に杏を配してある。

この③の組み合わせは四で見たように張正見の「神仙篇」にあり、六朝時代は神仙世界の描寫に使われていた。

ところが唐代では隱逸世界の描寫に使われている。この變化を考えると、唐代になって陶淵明が隱逸詩人の宗としてその詩と共に高い評價を受けるようになった事、そしてそれにつれて「桃花源記」の桃花源や桃（花）が不思議の世界から超俗の世界へとそのイメージを轉換したことが一因していると思われる。ただこういった詠じ方は、實は盛唐以後は殆ど見當らなくなる。

◎「杏壇」即ち『莊子』漁父を典故に使うもの。例えば王維の「田園樂」其三に、

杏樹壇邊漁父

杏樹壇邊の漁父

桃花源裏人家

桃花源裏の人家

とある。杏樹の句は『莊子』漁父に

孔子遊乎緇（惟）之林、休坐乎杏壇之上……有漁父者、下船而來（孔子緇惟（帷）の林に遊び、杏壇の上に休坐す……漁父なる者有り船を下りて來る）

とあるのをふまえる。これと陶淵明の「桃花源記」で隱逸世界を描いている。又、杜甫の「八哀詩」其七に

空聞紫芝歌

空しく紫芝の歌を聞くも

不見杏壇丈

杏壇の丈を見ず

漢詩に於ける杏花のイメージの變遷

とある。紫芝歌は商山の四皓の故事をふまえる。杏壇丈は孔子に比した丈（長者・丈人）。二句で徳の高い隱者をいう。又、王維の影響を受けている中唐の錢起の「幽居暮春書懷」（二本に「石門暮春」に作る）に

更憐童子宜春服 更に憐れむ童子の春服に宜しきを

花裏尋師到杏壇 花裏に師を尋ねて杏壇に到る

とある。この杏壇は、更憐の句が『論語』先進篇の點（曾皙）の言葉、

暮春者春服既成、得冠者五六人童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸（暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人を得て、沂に浴し、舞雩に風して、詠じて歸らん）

をふまえ、ここでは村の學校といった意味。作品自體は隱逸生活の一コマを詠じている。これらの例はいずれも「杏壇」を隱逸世界の象徴に使っている。

しかし、これが中唐以後の詩人の用例を見ると、例えば、中唐・白樂天の「尋王道士因有題贈」詩には

行行覓路緣松橋 行行路を覓むるに松橋に緣り

步步尋花到杏壇 步步花を尋ねて杏壇に到る

とあり、この杏壇は仙郷に比した王道士の居所を象徴するものになっている。又、晩唐・李群玉の「湘妃廟」詩には

相約杏花壇上去 相い約して杏花壇上に去り

畫欄紅紫罽蒲 畫欄紅紫罽蒲を闌かわす

とあり、湘水の女神と杏花壇上でデートしよう、という。この杏（花）壇も仙郷の象徴となっている。又、晩唐・曹唐の「小遊仙」詩には

昨夜相邀宴杏壇 昨夜相い邀して杏壇に宴し

等閑乘醉走青鸞 等閑醉いに乘じて青鸞を走らす
とあり完全に仙人世界、仙郷の喩えに使っている。つまり、盛唐のこ
ろまでは隱逸世界の象徴であった「杏壇」が、中唐以後、仙人世界、
仙郷の象徴に變化してゐるのである。

この變化には、唐代に於ける道教の盛行が反映してゐると思われ
る。唐朝は李姓であることにより、老子（姓は李）を崇めた。高宗は
老子に太上玄元皇帝と追號し、玄宗は玄元廟を置き、老子に大聖祖の
號を加え、更に大道玄元皇帝と稱した。『舊唐書』禮儀志に次の記事
がある。

「開元二十年正月己丑詔兩京及諸州、各置玄元皇帝廟一所、並置
崇玄學、其生徒令習道德經」（開元二十年正月己丑兩京及び諸州
に詔して、各々玄元皇帝廟一所を置き、並て崇玄學を置き、其の
生徒に道德經を習わしむ）

こういつ時勢になれば、道教の學問所を杏壇と稱しても、更には道士
がいる所を即ち聖域を杏壇と見立てるようになるのも自然の流れと推
量できる。

そこで④にもこの傾向があるか検討すると、杏は晩唐まで仙人世
界、仙郷を象徴する植物として詠じられてゆくが、やはり盛唐以前と
以後とでは表現法に少し違いが見られる。

盛唐以前は、先に見たように張九齡が種杏といひ、王維が虎賣杏と
いふ如くただの杏ではなくて仙人の杏である事を明示する表現をして
いる。他にも例えば杜甫の「大覺高僧蘭若」詩には

香廬峰色隱晴湖 香廬の峰色は晴湖を隱し
種杏仙家近白榆 杏を種えし仙家は白榆に近し
とある。白榆は「古樂府」の「天上何所有、歷歷種白榆」（天上何の有

る所ぞ、歷歷白榆を種う）に據る語で、星のこと。天上に近いことをい
う。又、李白の「送李之江東」詩では、

禹穴藏書地 禹穴は書を藏する地
匡山種杏田 匡山は杏を種えし田

と、茶母潛は「過方尊院」詩で
更上縣圃上 更に上る縣圃の上
仍種杏成林 仍りて杏を種えて林を成す

と、皇甫冉は「送張道士歸茅山謁李尊師」詩で
無窮杏樹行時種 無窮の杏樹行時に種え
幾許芝田向月耕 幾許かの芝田月に向い耕す

と、無窮の杏樹と修飾語を付けている。これは杏樹を詠じた王維
の「遊春田」其二にも、
上苑無窮樹花開 上苑無窮の樹花開く
と使われている。この様に特殊な仙味を帯びた杏であることわって
使う例が多い。

以後にもこういつた使われ方もなくはないが、しかしやはり主流は
杏を仙人世界につきものの植物として即ち仙人の杏と示さずに詠じる
方向である。例えば中唐・張繼の「上清詞」には

春風不肯停仙馭 春風仙馭を停むるを肯せず
却向蓬萊看杏花 却て蓬萊に向い杏花を看る
とあり、張籍の「尋仙」詩には

谿頭一徑入青崖 谿頭一徑青崖に入れば
處處仙家隔杏花 處處の仙家杏花を隔つ
とあり、李端の「雲陽觀寄袁稱」詩に

花洞晚陰陰 花洞晩れて陰陰たり

仙壇隔杏林 仙壇杏林を隔つ

という。これらは韻字の都合上から杏花、杏林と表現したものの。更に

晩唐の詩人の例を見ると、曹唐の「小遊仙」詩に、

海上風來吹杏枝 海上風來たりて杏枝を吹く

崑崙山上看花時 崑崙山上花を看る時

といい、同じく「王遠宴麻姑蔡經宅」詩に

好風吹樹杏花香 好風樹を吹き杏花香しく

花下眞人道姓王 花下の眞人姓を道う王と

という。又、張翥の「遇道者」詩では

聊看杏花酌 聊か杏花を看て酌み

便以換顏容 便ち以て顔容を換う

とあり、陸龜蒙の「寄懷華陽道士」詩に

常思近圃看栽杏 常に思う近圃に栽杏を看んと

擬借鄰峰伴采苓 借らんと擬す鄰峰采苓を伴うを

とある。栽杏は平仄と韻字の關係からの語。

これらの例から、中唐以後は、杏に『述異記』や『神仙傳』の典故を想起させるような修飾語をことさらに付けなくても、杏(花) 自體に仙郷仙人世界につきものの植物といったイメージが定着していた、と窺える。

なお、⑧に關しては先に見たように盛唐以後は殆ど用例を見なくなるが、杏花に隱逸世界の植物というイメージは残り、例えば中唐・錢

起の「暮春歸故山草堂」詩に

谷口殘春黃鳥稀 谷口の殘春黃鳥稀に

辛夷花盡杏花飛 辛夷の花盡き杏花飛ぶ

とある。これは王維の「輞川集」に倣うもの。

以上のことから、六朝時代に開發された仙味を帯びた植物のイメージが、唐代に更に發展し、中唐以後には仙人にまつわる典故を想起させたり、仙人の杏といった修飾語を用いずとも、杏花自體で仙人世界を象徴できるほどにこのイメージが杏花に定着した、と見る事ができると思う。

この過程で興味深いイメージの變換が二例あった。第一は⑥で見たように六朝時代に隱逸世界を象徴する萌芽かと思われた「杏壇」が、盛唐のころまでこの方向に發展したものの、中唐以後は唐王朝が老子を尊重し、道教が盛行した影響を受けて仙人世界の象徴へとイメージが變った事。

第二は第一とクロスする形になるが、⑨で見たように、六朝時代に仙人世界を示した陶淵明の桃(源)と仙人(董奉)の杏(林)の組み合わせが、唐代に於ける陶淵明の隱逸詩人としての評價の高まりを反映して、隱逸世界の象徴へとイメージを變えた事、である。

いずれにしても、杏花に仙人世界のイメージが定着し、そこから隱逸世界のイメージも派生した、といえよう。

次に、こういった超俗のイメージの對極にあると思われる(二)科擧合格の吉祥花のイメージについて検討する。

(二) 科擧合格の吉祥花のイメージ

杏花に科擧合格の吉祥花のイメージが付いたのは、科擧の合格者に天子が杏園(長安の曲江の西にある)で祝宴を賜ったことに由來する。

『秦中歲時記』に

進士杏花園初會、謂之探花宴。以少俊二人、爲探花使、遍遊名園。若他人先得名花、則二人被罰(進士の杏花園に初めて會する、之

を探花宴と謂う。少俊二人を以て探花使と爲し、遍く名園を遊す。若し他人の先に名花を得れば、則ち二人は罰を被る」とある。又、『唐摭言』に

進士神龍以來、杏園宴後、皆於慈恩寺塔下題名（進士は神龍（七〇五）七〇七）以來、杏園の宴の後、皆慈恩寺の塔下に名を題すともある。この祝宴は數千本の杏花が咲き亂れる杏園で、天子をはじめ都中の高官・貴顯が列席して催される華やかな大宴會で、合格者にとつては生涯で最も榮光に満ちたハレの日であった。従つてこの吉祥花のイメージは科擧の制度が定着し、詩人の人生に科擧の合否が大きく影響するにつれて定着していったであらうことは充分想像できる。事實、次の例に見るように、中唐以後、晚唐の詩にこの用例は多く見られる。

最も象徴的な例は、始めに掲げた中唐・張籍の詩「哀孟憲」である。

曲江院裏題名處 曲江院裏名を題せし處

十九人中最少年 十九人中最も少年

今日春光君不見 今日春光君見えず

杏花零落寺門前 杏花零落す寺門の前

張籍が科擧の同期の合格者・孟寂の死を悼んでの作。春の光の中にハラハラ散る杏花に、若死にした友人を悼む氣持がよく象徴されているが、これはかつての合格者としての榮光にあふれていた日に、杏園と一緒に杏花を見たからこそ感傷といえよう。杏園での祝宴の様子を見てみよう。中唐、白樂天の「酬哥舒大見贈」詩。

去歲歡遊何處去 去歲の歡遊何れの處にか去く

曲江西岸杏園東 曲江の西岸杏園の東

花下忘歸因美景 花下歸るを忘るるは美景に因り
樽前勸酒是春風 樽前酌を勸むるは是れ春風

…後略…

この詩には「去年與哥舒等八人同登科第今妓會散之意」と注がある。（杏）花に酔い酒に酔い合格の歡喜に同期の連中が打ち揃って浮れている姿が彷彿とする。この様であれば、杏園の祝宴を體驗した詩人にとつて杏花は特別な感慨をもたらす花となる。同じく白樂天の「杏園花下贈劉郎中」詩にいう。

怪君把酒偏惆悵 怪む、君が酒を把り偏に惆悵するを
曾是貞元花下人 曾是是れ貞元花下の人

貞元は德宗の時の年號（七八五～八〇五）。科擧に合格したものの以後の人生に惱む友人に、榮光の日の杏花を示して勵ましている詩である。又、左遷された土地で杏花を見ての作もある。中唐・韓愈の「杏花」詩で、

居隨北郭古寺空 居は隣す北郭の古寺の空しきに

杏花兩株能白紅 杏花兩株能だ白紅

曲江滿園不可到 曲江滿園到るべからず

看此寧避雨與風 此を看るに寧ぞ避けん雨と風

…中略…

豈如此樹一來甌 豈に如かむや此の樹一たび來たりて甌ばむに
若在京國情何窮 若し京國に在らば情何ぞ窮らむ

…後略…

という。陽山（廣東省陽山縣）の縣令に流されていた三七歳の時の作。異様な風物の中で都・長安をそして榮光の日の曲江を偲ばせる杏花を

見ての感慨である。

これらはかなり象徴的な科擧合格の吉祥イメージの杏花だが、晩唐になると、より直接的に科擧にまつわる様々な立場から詠われるようになる。例えば受験生を勵ます場合、晩唐・李群玉の「贈魏三十七」詩にいう。

莫放燄光高二丈 燄光を放ち高さ二丈にならしむなかれ

來年燒殺杏園花 來年杏園の花を燒殺せん

才氣の炎を二丈もの高さ上げてはいけない、來年（合格して祝宴を賜る）杏園の花を燒き盡くしてしまふから、と。

自分自身が合格した場合は、晩唐・劉創の「及第後宴曲江」詩にいう、

及第新春選勝遊 及第の新春選勝の遊

杏園初宴曲江頭 杏園の初宴曲江の頭

友人の合格を喜ぶ場合は、晩唐・趙嘏の「喜張濱及第」詩にいう、

春風賀喜無言語 春風賀喜して言語無し

排比花枝滿杏園 排比の花枝杏園に滿つ

言葉もない程嬉しいのである。

自分は落第して友人が合格した場合は、晩唐・温庭筠の「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩詩」にいう、

知有杏園無入路 杏園有るを知るも入路無く

馬前惆悵滿枝紅 馬前に惆悵たり滿枝の紅

合格者を羨む氣持と、落第して田舎に歸る自分の惨めさが、杏園に咲き誇っている「紅」い杏花によく象徴されている。

なお、(4)で見たように杏花の色は四種あるが、吉祥花のイメージの場合は「紅」であるようだ。宋代になってからの畫題にも「尙書紅

漢詩に於ける杏花のイメージの變遷

杏」がある。中國人が吉祥のイメージを持つ「紅」と重ったのかも知れない。晩唐・鄭谷は「曲江紅杏」詩で。

道是春風及第花、道うは是れ春風及第花

といい、曲江の紅杏を「及第花」と呼んでいる。以後、及第花は（紅）杏花の雅稱となった。

以上、唐代に出現した科擧合格の吉祥花のイメージを見た。科擧制度の定着を裏付けるように中・晩唐の詩に於いて悲喜こもごもの場面で詠じられている。杏園及び曲江の杏花は杏園の宴と相俟って都・長安の春景色の點景としても盛んに詠じられているが、ここでは述べない。

七 結び

漢詩に詠じられる植物は数多いが、本稿で檢證したように、杏花はど時代の流れに沿ってイメージがふくらんだ植物は珍しい。杏花は各時代の人々の非常に近くにあつて、その生活、美意識、文學潮流、思想風俗、社會制度等を驚くほど忠實に反映して、新しいイメージを出現、展開している。これは杏花のイメージの特異性といつてよいと思われる。同時に詩が發展する一つの軌跡を示したものともいえよう。そしてこういった杏花のイメージの特異性が、例えば「清明」詩の杏花（村）のイメージを分りにくくしていると考えられるのである。

注(1) 文字學的な杏の考證は『中國古代の植物學の研究』（永上靜夫著、角川書店）の第二篇第四節杏、一二四頁―一二三頁に詳しい。

(2) 『隋書』經籍志子部五行類に、師曠書三卷が著録されている。『新唐書』及び『舊唐書』志部經籍五行類には、師曠占書一卷と、なっている。

(3) 『隋書』經籍志子部農家類に、汜勝之書二卷、漢議郎汜勝之撰、とある。

(4) 文杏は『太平御覽』卷九六八果部五杏の項に引く『西京雜記』に、上林有文杏蓬萊杏、とある。

(5) 梁武帝の「碧玉歌」(一本に吳聲歌曲碧玉歌に作る)に「杏梁日始照、蕙席歡未極」、梁・簡文帝「艷歌曲」に、「雲楣桂成戶、飛棟杏爲梁」、又「怨歌行」に「十五頗有餘、日照杏梁初」、又、梁・沈約の「八詠詩」霜來悲落桐に「薛荔可爲裳、文杏堪作梁」、又、梁・費昶の「詠照鏡」に「晨暉照杏梁、飛燕起朝妝」、又、梁・上黃侯暉の「奉和太子秋晚詩」に「杏梁照初月、蓮池引夕風」、又、梁(北周)・庾信の「夢入堂內」に「雕梁舊刻杏、香壁本泥椒」、同じく「登州中新閣」に「千尋文杏照、十里木蘭香」、又、梁(陳)・張正見の「艷歌行」に「城隅上朝日、斜暉照杏梁」とある。

(6) 梁・劉孝綽「渡建興渚示陸二黃門」に「猶聞東下吹、尙識杏間堂」、梁(北周)・王褒「九日從駕」に「高旆長檄坂、緹幕杏間堂」、梁(陳)・江總の「洛陽道」に「杏堂歌吹合、槐路風塵饒」、とある。

(7) 中唐・劉長卿の「春過裴虬郊園」に「郊原春欲暮、桃杏落紛紛」、中唐・盧綸の「送王尊師」に「旌幢天路晚、桃杏海山春」、晚唐・唐彥謙の「曲江春望」に「杏艷桃光奪晚霞、樂遊無廟有年華」とある。

(8) 例外として晚唐・溫憲の「杏花」詩に、「澹然閑覺久、無奈似嬌饒」の句がある。嬌饒は『玉台新詠』收載の「董嬌饒」詩に詠じられている美女。この詩はこの美女を杏花の美しさに比している。

(9) 『佩文齋廣群芳譜』花譜篇・杏の項に「花は二月に開く、未だ開かざる時は純紅、開く時は白にして微かに紅を帯ぶ、落ちるに至れば則ち純白なり」とある。これに據ると花が開くにつれて色が變化することになる。

(10) 『庚子山集注』(中國古典文學基本叢書)の許逸民校點の、「校勘記」

に、この句を、「移黎付苑吏」として、「黎」、《英華》作「梨」、屠本作「黎」。按作「梨」近是。とあるのに據った。

(11) 中唐・錢起の「過瑞龍觀道士」に「鶴符成丹日、人尋種杏田」とあり中唐・韋應物の「寄黃尊師」に「結茅種杏在雲端」とある。

(12) 中唐・錢起には他にも「龍章陵令山居過中峰道者」其二に「杏田溪一曲……採藥長不返」とあり、又「送宋徵君讓官還山」に「魏闕辭花緩、春山有杏田」とある。杏花を隱逸世界のものとして描く例は、盛唐・儲光羲の「釣魚灣」にも「垂釣綠灣春、春深杏花亂」とある。

(13) 五(一)で見た劉長卿の「過鄭山人所居」の「杏園」は、桃源の源と韻を合わせたもの。吉祥花のイメージを示す「杏園」ではない。